



Title	ポルトガル語の縮小接尾辞：サンパウロ市教養層における-inhoと-zinhoの分布
Author(s)	鳥居, 玲奈
Citation	ブラジル研究. 2011, 7, p. 55-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106526
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ポルトガル語の縮小接尾辞

—サンパウロ市教養層における-inho と-zinho の分布—

鳥居 玲奈

1. はじめに

ポルトガル語には様々な縮小接尾辞 (sufixo diminutivo) ⁱが存在するが、とりわけ-inho と-zinho は文語・口語ともに高い生産性を持つⁱⁱ。しかしながら、規範文法書である以下の Cunha e Cintra (1984) の一節にも見られるように、語末が-s や-z である語を除くと、-inho と-zinho のいずれを選択すべきなのは話者の主観的選択に委ねられており、満足のゆく記述とは言いがたい。

Exceptuando-se o caso das palavras terminadas em -s e -z, que naturalmente exigem a forma -inho (*pires-inho, rapaz-inho*), não é fácil indicar as razões que comandam a escolha entre -inho e -zinho. Sente-se que muitas vezes a selecção está ligada ao ritmo da frase. (Cunha e Cintra 1984:93) ⁱⁱⁱ

そこで、これら2つの縮小接尾辞がそれぞれどのような環境で現れるかを調査するため、*A Linguagem Falada Culta na Cidade de São Paulo*^vで縮小接尾辞が付与されている全ての用例を抽出し分析を行った。すると、数量的には

・inho が付与されていた用例の方が圧倒的に多かったものの、本来・inho の付与が想定される環境で・zinho が付与されていた用例が比較的多く見られた。この結果から、・zinho の使用が・inho の使用より一般化している傾向にあるのではないかと推測できる。

したがって、本稿では縮小接尾辞・zinho がより広範囲にわたって用いられているという仮説から出発し、先行研究を基に言語学的観点から・inho と・zinho の分布を検証する。

本稿の構成は次の通りである。2 節でこれまでの縮小接尾辞に関する先行研究を概観し、本稿における立場を明確にする。続く 3 節で先述したコーパス内で縮小接尾辞・inho と・zinho が付与されていた語を分析した上で、最終的に結論へと導く。

2. 先行研究

2.1 規範文法書

Cunha e Cintra (1984) と並んでブラジルポルトガル語の代表的な規範文法書の 1 つである Bechara (2003:362) では、縮小接尾辞・inho と・zinho の付与に関して以下のように述べられている。

- (B1) 語末が・s や・z の名詞や形容詞には・inho しか付与されない。例として *tenisinho*, *lapisinho*, *rapazinho* などがある。
- (B2) 語末に鼻母音、二重母音、強勢母音が来る名詞や形容詞には・inho ではなく・zinho が付与される。例として *cãozinho*, *irmãzinha*, *alunzinho*, *raiozinho*, *bonequinho* などがある。
- (B3) 語末が・r の名詞や形容詞にも・zinho が付与される。例として *serzinho*, *cadaverzinho*, *caracterzinho* などがある。ただしこの場合、・inho が付与されることもある。

この記述から、(B1)については、既に取り上げた Cunha e Cintra (1984) の記述と同じ内容であることが分かる。さらに Bechara (2003) は、語末が鼻母音、二重母音、強勢母音である場合には・zinho が付与され、語末が・r の場合には、本来・zinho が付与されるが、場合によっては・inho が付与されることもあると述べている。そして、後者のケースの 1 例として *colher* が挙げられ、これが

colherzinha となることもあれば、colherinha となることもあるという。

この規範文法書では、上記の(B1)では・inho が付与され、(B2)、(B3)では・zinho の付与が一般的であると記述されているにとどまり、それ以外のケースについては全く触れられていない。このことは、(B1)と(B2)以外では、・inho と・zinho の選択が任意であることを意味し、Cunha e Cintra (1984) の記述とそれほど違いは見られない。

2.2 Skorge の研究

Skorge は、ポルトガル語に存在するあらゆる縮小接尾辞について調査し、雑誌 *Boletim de Filologia* のおよそ 150 ページにわたって記述的研究を残している。この研究は、ポルトガルのポルトガル語を対象としているものの、本稿のテーマでもある・inho と・zinho の問題が大きく取り上げられているため、以下にその内容を詳しく見て行くことにする。

Skorge (1956) は、以下の(S1)から(S8)で・inho と・zinho のいずれの縮小接尾辞が用いられるのかを調査している。さらにこの分類に加えて、Skorge は、語の使用頻度や話者の教育レベル、出身地といった言語外的要因による相違が・inho と・zinho の選択にどのような影響を引き起こすかについても詳しく触れている。

(S1) 語末の母音が無強勢の名詞

(S2) ラテン語起源の語と外来語

(S3) ギリシア語起源の語と・a で終わる男性名詞

(S4) 強勢のある二重母音に無強勢の母音が語末に続く名詞 (例: aldeia)

(S5) 母音接続で、強勢母音に無強勢母音が語末に続く名詞 (例: rua)

(S6) 語末が・io または・io の名詞

(S7) 形容詞

(S8) 語末が r または・l の名詞

この研究全体において、Skorge (1956) はまず、形容詞と名詞に付与される縮小接尾辞の違いについて述べている。それによると、形容詞には、その語が 1 音節で構成されている場合や特に強調したい場合を除き、通常・inho が付与されるという。一方、名詞は状況によって・inho が付与される場合と・zinho が付与

される場合に分類されるという。そして、語の音節数に着目し、名詞にいずれの縮小接尾辞が付与されるのかを調査している。

例えば、pá や chá のような1音節語では、・inho を付与することにより、唯一の母音である a が削除されてしまう。そのため通常・zinho が付与され、pazinha, chazinho という形が用いられるという。

2音節以上の語については、とりわけ語末の母音が無強勢の名詞である場合に限って記述されている。2音節語の場合、cama, casa, livro などのように日常頻繁に用いられる語には短い方の縮小接尾辞・inho が付与されるという。しかし、この条件は絶対的ではなく、場合によっては・zinho が付与されることもあるという。それは、強調の目的や同じ縮小辞形の繰り返しを回避するためであるという。また、一般的に・inho は庶民によって用いられる形であるのに対し、・zinho は教養層によって好まれる形であるとも述べられている。

3音節語についても2音節語と同様、使用頻度の高い語には・inho が付与されるが、語によっては・zinho が付与されることもあるという。

4音節以上の語では、・zinho が用いられる傾向が高いことが指摘されている。

要するに、単音節語か4音節以上の語では一般的に・zinho が用いられるが、それ以外の場合には・inho も・zinho も用いられ、その選択基準として、語の使用頻度や話者の教育レベルの他に強調といった文体的要素が作用するということである。

一方、aldeia のように2重母音に続く語末の音節に無強勢母音が来る名詞や、rua のように語末が無強勢母音の母音接続の名詞、また語末が・ío、・io、・l、・r の名詞については地域差があり、これらの名詞で語末が無強勢の名詞には、ポルトガル北部地方では・inho が用いられ、南部地方では・zinho が用いられる傾向がある。語末が・ío、・eiro、・aio、・oio の語も北部地方では・inho が好まれるか、場合によっては・zito が用いられるのに対し、南部地方では・zinho が好んで用いられる。ところが、語末が・l、・r の語の場合、ペイラ以北の地域では・zinho が付与され、アルガルベやアレンテージョでは・inho が付与されるが、リスボンやペイラバイシャではいずれの縮小接尾辞も付与される。

最後に、ラテン語・ギリシア語起源の語や外来語についてであるが、Skorge (1956)によるとこれらの語には通常・zinho が付与される。Skorge はここですらに興味深い点について触れている。drama のような語末が・a のギリシア語起源の男性名詞には、本来・zinho が付与されるが、・inho が付与されることもある

という。しかし、後者が付与されると、*·inh* は接尾辞ではなくなり、接中辞になるというのである。それは、これらの語に*·inho* が付与されると、もとの名詞の文法性の標識ではなく、その名詞の最後の母音が*·inho* の最後の母音に反映されるからであるという。つまり、*poema* に*·zinho* が付与されると *poema* の文法性の標識が*·zinho* の最後の母音に写され *poemazinho* となるが、*·inho* が付与された場合は *poeminha* となり、基体語の文法性ではなく、その語の最後の母音*·a* がそのまま接尾辞の最後の母音に移るのである。

このように、*·inho* を接尾辞と捉えていたかと思えば、状況次第でポルトガル語では本来存在しないとされている接中辞として解釈するなど、言語学的には一貫性を欠く記述が見られるものの、話者の教育レベル、出身地といった社会言語学的視点や方言学的視点、また文章全体における語の重要性といった文体論的視点といった様々な視点から*·inho* と*·zinho* の相違を調査している点では極めて興味深い研究である。

2.3 Moreno の研究

一方、Skorge (1956) が様々な異なる視点から縮小接尾辞を分析したことに反し、一貫して言語学的視点からこれら2つの縮小接尾辞の関係を調査したのは Moreno (1977) である。Skorge が*·inho* と*·zinho* の付与を音節の数を基準としたことを受けて、Moreno は、ポルトガル語の語構造の基準となるのは音節の数ではなく音節の位置であると反論し、語における3つの強勢の位置によって*·inho* か*·zinho* が選択される可能性について調査した。その上で、以下の6つの可能性に分類した。

- (M1) 強勢が語末から3番目の音節にある語と語末の音節にある語
- (M2) 強勢が語末から2番目の音節にあり、/l/で終わる語
- (M3) 強勢が語末の音節にあり、子音で終わる語
- (M4) 強勢が語末から2番目の音節にあり、母音接続や二重母音で終わる語
- (M5) 強勢が語末の音節にあり、/s/で終わる語
- (M6) 音節が語末から2番目の音節にあり、語幹母音のない語

Moreno (1977) の記述によると、(M1)の強勢が語末から3番目の音節にある語（以後 *proparoxítone* と呼ぶ）は、*·inho* との結びつきが弱い。その理由とし

て、主にこれらの語は学識語が多く、より大衆向けの使用とされる縮小接尾辞が付与されることが少ない語でもあるからだという。

Moreno (1977) はまた、abóbora や xícara のような語に・inho が付与された場合、日常語では aboborinha や xicarinha ではなく、abobrinha や xicrinha といった形が好まれることについても触れている。Moreno の記述から、これらの語は、もともと proparoxítone である基体語を語末から 2 番目の音節に強勢が置かれる語（以後、paroxítone と呼ぶ）に変化させ、その後・inho を付与することによって形成されると推測されるが、これは、proparoxítone への・inho の付与を回避する 1 つ手段なのかもしれない。

同様に、強勢が語末の音節にある語（以後、oxítone と呼ぶ）についても・zinho の使用が一般的であると Moreno (1977) は述べている。とりわけ(M3)のように語末が子音の場合には、・inho の付与も可能ではあるが、ブラジルでは・zinho がより広く用いられるという。例えば、bilhar や mulher といった語に、・inho が付与されて、bilharinho や mulherinha となることもあるが、ブラジルでは通常 bilharzinho や mulherzinha のように・zinho を付与することが多いという。

ところが、(M5)のように、oxítone で語末が/s/の語では、・zinho と・inho のいずれが付与されているのかを判断することは極めて困難である。Moreno (1977) はこの場合・zinho が付与されていると見なしている。これは、強勢の位置にかかわらず語末が・s か・z である場合には、・inho が付与されるとする大半の規範文法家の立場とは異なる。規範文法書では表記だけをたよりに・inho の付与を決定しているのに対し、Moreno は、表記に加え音にも基準を置いているために生じる相違であろうと考えられる。例えば、cartaz や gás といった語が cartazinho, gasinho となるのは、規範文法家によれば、cartaz+・inho, gás+・inho といった分析がなされるが、Moreno は、cartazinho や gasinho に/z/が維持されているのは、cartaz や gás に・zinho が付与されているためだと主張している。gás のように語によっては・s で表記されるのは、・s や・z が母音間にある場合はいずれの場合も/z/の音が維持されるため、単に表記上の慣習に従っているだけであるという。しかし Moreno 自身、この状況で・zinho が付与されていると判断する理由は、論に一貫性を持たせるためでもあることを明確にしている。したがって、・inho と・zinho のいずれが付与されるかを見極めることは、改めて容易ではないことがうかがえる。

一方で、(M2), (M4), (M6)は、いずれも paroxítone に関するものであり、ポ

ルトガル語の語彙の中で最も多いパターンである。まず、語末が/i/となる(M2)では、Moreno (1977) は *ave*, *bule*, *salame*, *dente* といった語を例として挙げ、これらの語にはいずれの縮小接尾辞も付与され得るという。しかし、*ave* や *bule* には *-inho* の付与が不自然であるのに対し、*salame* や *dente* にはそれが感じられない。これには考慮すべき点が2点あるという。

1点目は、*-inho* が付与される場合は、*-inho* の/i/と基体語の最後の母音である/i/が同じ音だということである。例として *cidade* という語を取り上げると、理論的には *cidade* + *-inho* で *cidadinha* が成り立つはずであるが、通常 *cidade* には *-inho* ではなく *-zinho* が付与されることが多い。これは、接尾辞の最初の母音/i/と基体語の最後の母音/i/の結合を回避するためであろうと考えられる。同様の理由が *bule* や *ave* にも当てはめられるであろう。

ところが同じように母音結合の環境にあるにもかかわらず、それを回避することなく *-inho* が付与されることもある。それが *salame* や *dente* のような語の場合である。Moreno (1977) によると、このような場合、何らかの言語外的要因が働いているためであるという。それは、Skorge (1956) が取り上げた語の使用頻度や社会言語学的、文体論的要因のことであろうと考えられるが、Moreno はこれらの要因については詳しくは触れていない。

続く(M4)の語末が母音接続か二重母音のケースについて、Moreno (1977) はさらにこれらを以下の(M4a), (M4b), (M4c)に下位区分している。

(M4a) 語末が母音接続で、*lua*, *nua* のように強勢母音が/i/以外の場合。

(M4b) 語末が母音接続で、*dia*, *tia* のように強勢母音が/i/の場合。

(M4c) *tábua*, *história* のように語末が上昇二重母音の場合。

語末が母音接続である(M4a)と(M4b)では、唯一の相違は強勢母音にある。Moreno (1977) は、(M4a)では *-inho* と *-zinho* の両方が用いられるのに対し、(M4b)では、強勢母音の/i/と *-inho* の/i/の結合を回避するため、*-zinho* が優先的に用いられるという^{vi}。そして、(M4c)では、(M4a)と同様、いずれの接尾辞も用いられるという。

最後に、(M6)の語幹母音が不在の *paroxítona* については、*açúcar*, *fácil*, *item*, *câncer*, *dólar* といった語が一例として挙げられている。Moreno (1977) によると、これらには通常 *-zinho* が付与されるという。

ところで、Câmara (1986) は、縮小接尾辞 *-inho* と *-zinho* の付与について、語末が強勢母音の語では強制的に *-zinho* が用いられるが、それ以外の状況では *-inho* か *-zinho* の選択は任意だと述べている。この定義から読み取れるように、理論的には、全ての語に *-zinho* の付与が可能であるのに対し、*-inho* はより限定された環境でしか付与され得ないことが分かる。Moreno (1977) は、この Câmara の定義と自ら設けた(M1)から(M6)を基に、最終的に以下の(M7)と(M8)を導き出している。

(M7) *-zinho* は全ての語に付与され得る。

(M8) 語末が開音節の *paroxítone* だけに *-inho* が付与され得る。ただし、(M4b) のように強勢母音が /i/ で、この母音が、*-inho* の付与によって削除される母音のすぐ前にある場合は除く。

このように、それまでの縮小接尾辞に関する研究が記述的であったのに対し、Moreno (1977) の研究は言語学的観点からより体系的に縮小接尾辞 *-inho* と *-zinho* の分析を試みていることが理解できるであろう。とりわけ興味深いのは、*-zinho* を単なる *-inho* の一変異形として捉えるそれまでの見解を覆し、*-zinho* の一般性を言語学的に正当化しようとする試みである。この Moreno の立場から、次節より *A Linguagem Falada Culta na Cidade de São Paulo* において縮小接尾辞が付与されていた語を調査して行くことにする。

3. 分析と結果

先述したように、本研究では *A Linguagem Falada Culta na Cidade de São Paulo* の 1 巻、2 巻、3 巻をコーパスとして用いた。なお、本稿ではサンパウロ市の教養層による *-inho* と *-zinho* の使用分布を調査したもの、言語学的観点からこれらの縮小接尾辞の関係を明らかにすることを目的としているため、話者の性別、年齢といった属性については一切触れていない。

これらのコーパスから縮小接尾辞 *-inho* と *-zinho* が付与されていた語を全て抽出したところ、異なり語数は合わせて 163 語であった。それぞれの縮小接尾辞が付与されていた用例数は表 1 の通りである。なお、用例が複数の文法性や文法数で出現していた場合は、名詞は単数形、形容詞は男性・単数形を挙げることにする。

表1 ·inho と·zinho の異なり語数

·inho	·zinho	計
130	33	163

この表からも分かるように、数量的には、·inho の用例が·zinho の用例の 4 倍ほど上回る結果になった。しかし、このような結果だけから、·zinho を·inho の変異形と位置づけてしまうのは極めて危険であろう。

次に Moreno (1977) にしたがってこれらの語を強音節の 3 つの位置 (oxítóna, paroxítóna, proparoxítóna) によって分類してみたところ、表 2 のような結果になった。

表2 強音節の位置による·inho と·zinho の分布

	oxítóna	paroxítóna	proparoxítóna	計
·inho	4	123	3	130
·zinho	19	11	3	33
計	23	134	6	163

この表から、·inho は paroxítóna で最も多く現れていることが明らかである。この結果は、Moreno (1977) が(M8)で述べていたことと一致している。一方、·zinho に関しては、oxítóna が最も多いものの、paroxítóna でも比較的多く現れていることが分かる。この点については、後ほど改めて言及することにする。proparoxítóna では、·inho と·zinho の出現回数は同数であった。

さらに、Skorge (1956) の研究にしたがい音節の数による分類も試みた。その結果は表 3 a, b の通りである。とりわけ多かったのは、paroxítóna で·inho が付与されていた 2 音節語と 3 音節語の用例であった。·zinho では、oxítóna の 1 音節語と 2 音節語が最も多かったが、paroxítóna の 2 音節語と 3 音節語も同様に出現回数が多かった。

表 3 a 強音節の位置と音節の数による·inho の分布

	oxítóna	paroxítóna	proparoxítóna	計
1 音節	0	—	—	0
2 音節	3	61	—	64

3 音節	1	54	1	56
4 音節以上	0	8	2	10
計	4	123	3	130

*—は、理論上存在し得ないことを示す。

表 3b 強音節の位置と音節の数による・zinho の分布

	oxítona	paroxítona	proparoxítona	計
1 音節	8	—	—	8
2 音節	9	5	—	14
3 音節	2	6	2	10
4 音節以上	0	0	1	1
計	19	11	3	33

*—は、理論上存在し得ないことを示す。

以下、強音節の位置を基に、個々の用例を詳しく見て行くことにする。

3.1 proparoxítona

語末から 3 番目の音節に強勢がある語では、すでに表 2 で見たように、数量的には・inho と・zinho に全く違いはなかった。・inho と・zinho が付与されていた語は以下の通りである。なお、括弧は用例の合計数を表す。

表 4 ・inho と・zinho が付与されていた proparoxítona の用例

	・inho	・zinho
3 音節語	passarinho (1)	feriazinha, geniozinho (2)
4 音節語	negocinho, sandalinha (2)	periodozinho (1)

Skorge (1956) では 4 音節以上の語には通常・zinho が付与されると述べられていたが、本調査では negocinho や sandalinha のように・inho の付与の方が多かった。また、Moreno (1977) でも proparoxítona には・zinho の付与が一般的であると述べられていたにもかかわらず、・inho と・zinho の付与はいずれも同数であり、本研究では先行研究とは異なる結果となった。

しかしながら、Winkelmann (2008) でも本研究と同様の結果が出ている。

そこでは、rápido, máquina, pássaro, música といった proparoxítone に -inho が付与されていたことを受けて、その理由を言語の経済性にあるとしている。もともと音節数の多い proparoxítone に -zinho を付与すると、-inho を付与するよりさらに 1 音節長くなってしまう。話者は、その煩わしさを回避するために -inho を選択するのだという。本調査の結果でもこれと同じことが言えるのではないかとと思われる。

また言語の経済性に加え、それぞれの語の使用頻度も関係しているのではないかと考えられる。上記の Winkelmann (2008) の用例や本調査の表 4 で -inho が付与されていた用例は、いずれも日常的によく用いられる語ばかりである。そのため、それらの語に言語の経済性の原理が働き、すでに -inho の付与が定着しているためであろう。

3.2 paroxítone

ポルトガル語では、語末から 2 番目の音節に強勢のある語が最も多く、本調査でもこの位置の用例数が圧倒的に多かった。以下の表 5 は paroxítone に -inho と -zinho が付与されていた用例である。

表 5 : -inho と -zinho が付与されていた paroxítone の用例

	-inho	-zinho
	agüinha, aulinha, blusinha, bolinha, bombinha,	bifezinho,
	botinha, calcinha, carinha, casinha, casquinha,	filmezinho,
	certinho, cestinha, chorinho, coisinha, continha,	nomezinho,
	corpinho, courinho, coxinha, cursinho, filhinho,	rugezinho,
	fininho, forminha, franguinho, franjinha,	trechozinho (5)
	fraquinha, gorrinho, grampinho, grupinho,	
2 音節語	latinha, levinha, livrinho, magrinha, mapinha,	
	mocinha, mocinho, nadinha, negrinha, noitinha,	
	pecinha, pertinho, pontinha, pombinha,	
	potrinho, pouquinho, prontinho, quadrinho,	
	restinho, risinho, rodinha, rostinho, roupinha,	
	sainha, sopinha, sujinho, talquinho, terninho,	
	todinha, trecho, velhinho, versinho, vidinha (61)	

3 音節語	barraquinha, barulhinho, batatinha, bocadinho, caminhozinho, bolachinha, bonitinho, cachorrinho, camisinha, cidadezinha, canhotinho, canudinho, carteirinha, cervejinha, circuitozinho, cineminha, cocadinha, coitadinha, coroinha, conversazinha, dinheirinho, direitinho, empadinha, esmolinha, leiturazinha, esqueminha, estojinho, estreitinha, exemplinho, saidazinha (6) fechadinho, fofquinha, garotinha, inteirinho, janelinha, lanterninha, ligadinha, macaquinho, meninozinho, meninazinha, minutinho, moreninha, pacotinho, panelinha, pedacinho, pequeninho, perourinho, pescadinha, pocadinho, poetinha, probleminha, quadradinha, quebradinho, salgadinho, sapatinho, sujeirinha, temperinho, torradinha, vassourinha, vestidinho (54)
4 音節語	aparelhinho, apertadinha, arrumadinha, (0) molecadinha, pequenininho, rapaziadinha, sanduichinho, trabalhadinha (8)

いずれの音節数においても、数量的には・inho の用例が・zinho の用例の 10 倍ほど上回っていたことは表 3 a, b からすでに読み取る事ができた。ここで、Moreno (1977) の記述をいくつか振り返ってみることにする。

(M8)によると、・inho が付与されるのは、(M4b)を除き、語末が開音節の paroxítone であった。上記の表 5 から、・inho の用例は全て語末が開音節であり、Moreno の記述通りであったことがうかがえる。ところが、同じ環境で・zinho が付与されていた用例も 11 例見つかった。この数字は、一見取るに足りない値に思えるかもしれないが、全体の割合から見れば必ずしも少ない値ではない。これらの例を、Moreno の(M2)の記述にしたがい、語末が/i/の用例とそれ以外の母音の用例に分類してみた。

(M2)では、語末が/i/の paroxítone は、・inho の付与も・zinho の付与も可能であったが、母音結合を回避する目的で優先的に・zinho が付与されることもあれば、その他の言語外的要因が働き・inho が付与されることもあると述べられていた。表 5 では、・inho が付与されていたのは、leve, noite, ponte, pacote,

sanduíche の5例であり、-zinho が付与されていた用例も同数で、bife, filme, nome, ruge, cidade であった。この結果から、いずれの縮小接尾辞も付与されるが、全体の割合からすると、Moreno の記述通り、-zinho の付与の方がより頻度が高いと言えるであろう。

一方で、語末が/i/以外の母音で-zinho が付与されていた用例も trecho, caminho, circuito, conversa, leitura, saída の6例見つかり、これらのほとんどが3音節語であったことが分かった。Moreno (1977) ではこの点については触れられていないが、(M8)の記述や今回の調査で語末が開音節の paroxítona に-inho が付与された割合の高さからすると、基本的にこの環境では-inho が付与されると誰もが予測するであろう。それにもかかわらず-zinho が優先的に付与されていたというのは、(M8)ではなく、いずれの語にも-zinho は付与され得るという(M7)が適応されたためであろうと言える。

上記のような日常頻繁に用いられる conversa や leitura のような語が-inho の付与により conversinha, leiturinha とはならず、あえて音節数の多い conversazinha, leiturazinha が用いられていたのは何故なのであろうか。

第一に考えられるのは、Skorge (1956) でも述べられていた、同じ縮小接尾辞の重複回避である。これは、-inho を付与した語を既に何度も使用した状態で、その繰り返しを避けるための手段として-zinho が付与されたとするものである。これを確認するためにこれらの語が現れていた前後の文脈に目を通してみた。しかしながら、重複して用いられていたケースは見当たらなかった。

次に考えられるのは、大半の文法書がそう主張するように、縮小の度合いを-inho よりもさらに強めるために-zinho が用いられたとするものである。以下は、trecho の縮小接尾辞形が用いられていた箇所の引用である。なお、表記は原文のままである。

(...) eles liam um trechozinho da Bíblia... e:: falavam alguma coisa Sobre esse trecho da Bíblia... mas ahn,,, disto PAra orientação religiosa propriamente ia bastante... distância não é? (...) o que aliás era muito bom... porque era um trechinho da Bíblia... e foi justamente uma coisa que... (*A Linguagem Falada Culta na Cidade de São Paulo vol.III*, 1988: 155)

ここでは、まず *trechozinho* が用いられ、その直後に同じ内容を *trecho* で受け、さらに少し離れた箇所では *trechinho* が用いられている。これが先述した重複の理由で *trechinho* と *trechozinho* が使用されたのであれば、*trechinho* が最初に現れるはずである。ところが、ここでは *trechozinho* の方が先に現れていたため、重複の理由とするにはつじつまが合わない。そうかといって、これを *trechinho* は *trecho* よりも、さらに *trechozinho* は *trechinho* よりも度合いが強調されているだめだとする説明でも十分とはいえない^{vii}。なぜなら、いずれも同じ「聖書の一節」という意味で用いられていることには変わりはないからである。

最後に考えられるのは、*-inho* と *-zinho* では後者の方がより広い範囲で用いられ得るというものである。両者が同じ意味で用いられるという前提で、仮に *-zinho* が *-inho* の変異形であれば、より一般的でその上より経済的な形を選択できる環境であえて特殊な形を選択する結果にはならないのではないだろうか。*-zinho* の方がより一般的で全ての語に付与できる縮小接尾辞なのではないかと仮定した所以はまさにここにあるが、この問題に関しては、別稿で改めて考察することにする。

3.3 oxítona

最後に語末の音節に強勢が来る語は、表 6 のような結果であった。

表 6 *-inho* と *-zinho* が付与されていた oxítona の用例

	<i>-inho</i>	<i>-zinho</i>
1 音節語 (0)		pozinho, sozinho, lâzinha, chazinho, parzinho, finzinho, mãozinha, mauzinho (8)
2 音節語	arrozinho, colarinho, colherinha (3)	botãozinho, cafezinho, chapeuzinho, comumzinho, fatorzinho, menorzinho, motorzinho, papelzinho, ruimzinho (9)
3 音節語	devagarinho (1)	algodãozinho, regiãozinha (2)

ここでの結果も、通常 oxítona には *-zinho* が付与されるという Moreno (1977)

の記述どおりであったことがうかがえる。しかし、*arrozinho*, *colarinho*, *colherinha*, *devagarinho* のように・*inho* が付与されていた用例も少数ながら見つかった。この場合も、言語の経済性や語の使用頻度が関係していると考えられるであろう。いずれにしても、(M3)ですで見たとように、語末が子音の *oxítona* には、基本的には・*inho* も・*zinho* も付与され得るが、ブラジルでは・*zinho* の使用が一般的であるという記述と一致する結果となった。

3.4 結果

このように、Moreno の(M1)から(M8)を基にコーパスの分析を試みた。その結果、以下のことが分かった。

proparoxítona の場合、先行研究では通常・*zinho* が付与されるとあったが、本調査では・*inho* が付与された用例数と・*zinho* が付与された用例数は同じであった。これは、日常的に使用頻度の高い語に言語の経済性の原理が作用したためであろうと考えられる。

paroxítona では、ほとんどの用例に・*inho* が付与されていた。語末が開音節の *paroxítona* はポルトガル語の語彙で最も多いパターンであるため、コーパスの用例の大部分がここに分類されたことは当然のことであろう。

一方、同じ環境で・*zinho* が付与されていた用例も見つかり、これらは語末が/*i*/の場合とそれ以外の母音の場合に分類された。前者の語末が/*i*/の場合では、・*inho* が付与されていた用例と母音結合を回避するため・*zinho* が付与されていた用例は同数であり、また・*zinho* が付与されていた用例は大半が2音節語であった。そして、後者の/*i*/以外の母音の場合でも・*zinho* が付与されていた用例が見られた。本来(M8)から・*inho* が付与され得る状況にあるにもかかわらず、これらの語には・*zinho* が付与されていた。このことから、Moreno の (M7)が適応されたものだと考えられるであろう。しかし、本稿では、ほとんどの用例が3音節語であったことと・*zinho* が付与されていたこととの関連性を探ることはできなかった。なお、*dia* のように(M8)で例外とされていた用例は、本調査では見つからなかった。

最後に *oxítona* の用例では、・*inho* が付与されていた用例と比較すると、・*zinho* の付与が5倍ほど多く見られた。・*inho* が付与されていた用例は、*arroz* を除くとすべて語末が子音・*r* の語であった。この場合、基本的にブラジルでは・*zinho* が付与される傾向があるが、・*inho* が付与されることもあることはすでに(M3)

で見た通りであり、今回の結果もまさにその記述通りであったと言えるであろう。

4. おわりに

本稿では、縮小接尾辞・zinho の使用がより一般化している傾向にあるという仮説から始まり、Cunha e Cintra (1984) や Bechara (2003) といった規範文法書、Skorge (1956-58)、Moreno (1977) の研究を概観した。これらの先行研究から、・zinho は・inho の変異形であるとするこれまでの見解を逆転させ、実際には・zinho の方がより広範囲にわたって使用され得ることが明らかになった。この立場から、*A Linguagem Falada Culta na Cidade de São Paulo* における縮小接尾辞の調査を行った。その結果、数量的には・inho が付与されていた用例の方がはるかに多かったものの、その環境はより限定されたものであった。とりわけ・inho の使用が多く見られた語末が開音節の paroxítona を除くと、・zinho の用例の方がより広範囲にわたって現れることが明らかになった。その上、・inho の付与が多く見られた語末が開音節の paroxítona ですら・zinho が付与されていた用例もあったことから、Moreno (1977) の(M7), (M8)がおおむね証明できたのではないと思われる。換言すれば、理論的には全ての語に・zinho の付与が可能であるのに対し、・inho の付与は、語末が開音節の paroxítona にほぼ限定されるというものである。しかしながら、Skorge (1956) の研究で触れた言語外的要因が作用することもあり、Moreno の規則が絶対的ではないことは、本稿でも繰り返し述べた通りである。

本稿は、縮小接尾辞・inho と・zinho の分布を明らかにすることを目的としていたため、・zinho の一般性を主張するに留まりその根拠について詳しく議論するまでには至らなかった。今後は、・inho や・zinho が用いられる際の文法性や文法数といった形態的立場から・zinho の一般性を再検証し、・inho と・zinho の関係をより深く追求することを課題としたい。

注

ⁱ 縮小辞を屈折と捉える立場もあるが、本稿では派生として捉え、縮小接尾辞と呼ぶことにする。

- ii Skorge (1956)によると、ポルトガル北部地方では-ito, -zito がより多く用いられるという。
- iii 「-s や-z で終わる語は、必然的に-inho (pires-inho, rapaz-inho) をとるが、それ以外の語では、どのような理由で-inho や-zinho が選択されるのかを明確にすることは容易なことではない。多くの場合、その選択は、文のリズムと関連している。」(訳は筆者)
- iv これは、サンパウロ市の教養層 (falante culto) を対象としたインタビューを転写したものである。
- v Sílvia Skorge, “Os sufixos diminutivos em português”, in *Boletim de Filologia*, Lisboa, 1956, pp.50-90 e pp.222-305, pp.76-77.
- vi Skorge (1956)によるとポルトガルの北部地方では rio の縮小辞形 riinho が用いられるという。しかし、これは地域的な使用に限定されるため、特殊なケースと考えられる。
- vii João Guimarães Rosa の *Primeiras Estórias* には、次のような一節がある。このような場合においては、-inho をさらに強調する目的で-zinho が用いられたと言えるであろう。“Parecia prender-se apenas pelos joelhos, a qualquer simples e insuportável finura: sua palma, sua alma. Ah... e quase, quasinho... quasezinho, quase...” (ROSA, 2005: 177)

参考文献

- Bechara, Evanildo, *Moderna Gramática Portuguesa*, Rio de Janeiro, Lucerna, 2003.
- Câmara Jr., J. Mattoso, *Dicionário de Linguística e Gramática: referente à língua portuguesa*, 13ª. ed., Petrópolis, Editora Vozes, 1986.
- _____, *Estrutura da Língua Portuguesa*, 35ª. ed., Petrópolis, Editora Vozes, 2002.
- Castilho, A. T. de e Preti, D. (orgs.), *A Linguagem Falada Culta na Cidade de São Paulo – Materiais para seu estudo - vol. I - Elocuções formais*. São Paulo, T. A. Queiroz/Fapesp, 1986.
- _____, *A Linguagem Falada Culta na Cidade de São Paulo – Materiais para seu estudo - vol. II – Diálogos entre dois informantes*. São Paulo, T. A. Queiroz/Fapesp, 1987.
- _____, *A Linguagem Falada Culta na Cidade de São Paulo – Materiais para seu estudo - vol. III – Entrevistas*. São Paulo, T. A. Queiroz/Fapesp, 1988.
- Cunha, Celso e Cintra, Lindley, *Nova Gramática do Português Contemporâneo*, Lisboa, João Sá da Costa, 1984.
- Moreno, Cláudio, *Os Diminutivos em -inho e -zinho e a Delimitação do Vocabulo Nominal em Português*, Dissertação (Mestrado em Letras), Universidade Federal do Rio Grande do Sul, 1977.
- ROSA, João Guimarães, *Primeiras Estórias*, 1ª. ed. especial, Rio de Janeiro, Nova Fronteira,

2005.

SKORGE, Sílvia, “Os sufixos diminutivos em português”, in *Boletim de Filologia*, Lisboa, pp.50-90 e pp.222-305, 1956.

_____, “Os sufixos diminutivos em português”, in *Boletim de Filologia*, Lisboa, pp.20-53, 1958.

Teixeira, Taize Winklemann, *A Forma e o Uso dos Sufixos -inho e -zinho em Variedades do Português do Sul do Brasil*, Dissertação (Mestrado em Teoria e Análise Lingüística), Universidade Federal do Rio Grande do Sul, 2008.

Kehdi, Valter, *Morfemas do português*, São Paulo, Editora Ática, 2003.